

読書と教養の文化史

—A・マンゲル著『読書の歴史』を参照して—

原田範行

*本稿は、掲題のタイトルで、2014年3月16日に開催された第3回日本国際教養学会全国大会において講演した内容の抄録である。講演に際しては多くの方々のお世話になり、またご教示を得た。厚く御礼申し上げたい。

1. 教養、読書、マンゲルの『読書の歴史』

教養という概念は多義的である。昨今日本の大学では「リベラル・アーツ」という語がよく使われるが、言うまでもなくこの語の本来の意味は、中世ヨーロッパにおける、いわゆる「自由七科」（文法、論理、修辭、算術、幾何、音楽、天文）を指す。その名称と理念の一部を19世紀以降の欧米の大学が活用し、複数の専攻を学べるようなスタイルの教育体系を構築したのが、今日の「リベラル・アーツ」、すなわち「教養（学部）」の原型である。しかしながら、この教養という語が、時に Culture、Cultivation、さらにはそういうものを身につけるための方法として広く Education の訳語としても用いられることがあるというのは、例えば『新和英大辞典』（研究社）などを引くと一目瞭然である。教養は、言うまでもなく、大学の教育体系の呼称として特化されたものではない。人間が人間として獲得した独自の知的能力という、教養の本質的な意味に焦点をあてるならば、これは確かに、文化や教育に近接する。和英辞典に示された語義は、単なる訳語としてだけではなく、本質的な両者の共通点を示すものと言ってよいだろう。すなわち、「教養の文化史」と言えば、人間が人間として獲得した独自の知的な能力が、諸種の人間集団において学習され継承されてきた軌跡、といった意味になる。

こうした教養の文化史を考えると、その源泉として、また重要な方法の一つとして登場するのが、書物と読書である。それは人間独自の知的能力の基礎が、思索や経験を書き記し、記録することによって醸成されるものにほかならないからである。確かに人間は、豊かな口承世界や「オーラル・コミュニケーション」の文化を生み出してきた。だが、知識にせよ思索にせよ、それが実質的な効力を発揮するのは、それが記録され、共有され、批判的に検証され、さらなる展開が記されることによってであり、その大半の過程は文字、すなわち書き言葉によって支えられたものにほかならない。書物を教養の文化史の源泉に位置づけるのは、この意味においてであり、読書とは、こうした書物を何らかの形で受容し学習し発展させる方法と捉えることができよう。舞台での現前性を重視し、役者が語る台詞のダイナミズムを最大限に発揮しようとしたシェイクスピアは、知られている限り、一語も劇の言葉を書き記さなかった。グーテンベルクによる印刷術発明から既に一世紀以上が経過していたにも関わらず、である。それは演劇人としての彼の規矩であったのかも知れない。だが、彼の作品に今日私たちが触れえるのは、彼の死後、1623年に刊行された、「ファースト・フォリオ」をはじめ、台本が書き言葉によって残されたからにはほかならない。教育機関での試験が、旧来の口頭試験から筆記試験に変わっていくのも、身分証明が口頭ではなく文書としての証明「書」になっていくのも、伝聞が新聞・ジャーナリズムとなっていくのも、教養の文化史における、書物と読書の重要性を示す事例と言えよう。

このような役割を担った書物と読書に関する先行研究は少なくない。電子媒体の登場に伴い、それが従来の紙媒体と共存するのか、それとも前者が後者を駆逐するのかといった議論が活発になってきた1990年代以降は特にその数が多い。また学校や社会において読書指導や読書会に対する意識が高まり、その方法論に関する検討も重ねられてきた。だがその中であって、筆者が特にアルヴェルト・マンゲルの『読書の歴史』に注目するのは次のような理由による。すなわちマンゲルは本書において、まさに書物によって人類が構築してきた教養や学問的蓄積を必ずしも既成の権威とはせず、むしろ初めて書物を読み、そこに記された知識に疑いの目を持って臨む読者の瑞々しい視点に立って、しかし同時に、包括的体系的な書物や読書と教養の文化史をある程度意識しつつ本書をまとめているからである。本書には「読者の歴史」という副題が付されている。読者の姿は、言うまでもなく、個性的で多様だ。それは時に安易な理論化や統一的な方法論を拒絶する。だが、読者が発揮するこうした強烈な個性こそ、読書をして広く教養の形成に寄与せしめたというのがマンゲルの視点であり、こうした読者の個性を教養の伝承と創造に不可欠な力と見なしている点において、本書はきわめてユニークなのである。

2. 読書とはどのような行為か？

本書においてマンゲルは、「最後のページ」と題された序章と、「見返しのページ」という終章の間に20の章を設け、読書の諸相と読者が発揮するさまざまな創造性を論じている。その議論は、前述の通り、包括的体系的を意識しつつも、読者の多様な個性をできる限り掬い取ろうとする努力に支えられており、安易な要約は避け

なければならないが、あえてここではそれを次の四つの観点から整理し、その内容を敷衍することにしたい。

(1) 文字を読むこと、記憶すること—人間と電子媒体

書き記された文字を読むとは、どのような行為であるのか。この問いについては、古代以来、さまざまな議論がなされてきた。モノを見ている人間はそのモノを空気を通じて受け取るのだと考えたアリストテレス。反対に、モノを見ている人間とは空気に「視覚精神」なるものを与え、そのモノを視覚可能にするとしたガレノス。文字を読む際の人間が、そもそも受動的であるのか能動的であるのかを問う両者のこの本質的な議論の結論は、今日にあっても必ずしも明らかではない。しかしながら、ひとつだけここで確実に言えることは、文字を読む行為とは、そのみに終始するものではなく、読んだ内容が何らかの形で記憶され、そしてその記憶が、今度は、読者自身の行動と思索に影響を与える過程を伴う、ということである。この、記憶とその活用というプロセスがなければ、それは読書にはならない。今日私たちは、電子媒体に収められた多くの書き言葉を有している。デジタル・アーカイブさえあれば、必要なときに必要なだけ、検索し参照すればよい—ともすれば私たちはこのような情報検索型の発想に傾きがちである。だがこうした発想の陥穽は、かりに電子媒体自体の損傷や、電子媒体が文字を読む人間の行為に適切か否かといった議論を除外して考えとしても、検索のために用意された電子媒体という膨大な貯蔵物に安心して、人間が実は読書をしなくなっている、あるいは文字を読んでもデータベースに依存してしまい、記憶を頼りにするという能力が劣化している、という点にある。マンゲルは、ザクセンハウゼンの強制収容所において、さながら歩く図書館のように、周囲の人々に作品を読んで聞かせていたという、「多くの古典作品を暗記していた」、ある恩師の父親のことを紹介している。「暗く、何の希望も慈悲もない場所で、求めに応じては、頭の中にあるウェルギリウスやエウリピデスの書物を広げ、古典作家が残した言葉を、書物を持たぬ人々に向かって朗読する」その姿は、のちにアメリカの作家レイ・ブラッドベリの『華氏四五一』に描かれることになった。検索と記憶が容易な電子媒体が日常的に人間社会に普及することは、読書によって得られる記憶という、人間の根本的な知的営為に重大な影響を及ぼしかねない、というのがマンゲルの危惧である。

(2) 自律的読者の誕生とその方法論

「賢君」と呼ばれた13世紀半ばのスペイン国王アルフォンソ・エル・サビオは、学校教育のあり方について、「教師は、書物を朗読し、それを最良の形で学生に理解させることによって、自らの学識をしっかりと学生に示さなければならない」と述べている。徹底したスコラ学的方法論であり、その教育的読書の手法は、中世ヨーロッパをはじめ世界各地にある程度共通してみられるものと言えよう。マンゲルは、このスコラ学的方法論の実際を、フランスのアルザス地域の中心的な町であるセレストの図書館に保存された二冊のノートブックによって検証している。この町のラテン語学校で、一四七七年から一五〇一年にかけて使われていたもので、合計約八〇〇頁。書き記したのはギラウム・ギゼンハイムとベアトウス・レナヌスという当時の学生である。

中世ヨーロッパにおける、ラテン語学校の一般的な姿は、まず読み書きに習熟し簡単な祈祷書などを読みこなせるようにする初歩的訓練が行われた後、読書術教本に進み、複雑な文法規則や語義の説明が行われることになる。かつては日本の多くの知識人が経験した漢文訓読の学習にも、類似点が見出されるだろう。こうした学習によっては、「ラテン語を話すこともできなければ、ラテン語で一通の手紙や一篇の詩も書けず」という不満が学生から出てくるのも同じ。だが、「思索とは、綿密に策定された法則によって作り上げられていくものである」とするスコラ学的観点に立てば、ラテン語読解のための修養は、思索そのものの鍛錬にほかならず、セレストのラテン語学校でも徹底した読解指導がなされていたことがノートブックからうかがえる。だがマンゲルが目にするのは、そうした訓詁学的手法において、従来、絶対的な権威であった注釈者や評釈者の解釈への依存が徐々に弱まり、これに代わって学生自身の解釈や自律的な思索、時には感想などが記されることになるという、ノートブックに見られる微妙な変化である。つまり、人文主義的な学習法の広まりによって、今や読者は「独力で読むことが必要になり、場合によっては、読んでいるテキストの価値や意味を、こうした従来への権威に照らしながらも自分で判断しなければならなくなった」のである。ここで注意しなければいけないのは、変化したのは従来の権威者への依存であって、読解の訓練を基礎とする手法そのものが変化したわけではない、ということである。自律的読者の誕生は、すなわち、正確な読解を前提としつつ、安易に「最良な形」を盲信することなく、自らの思索と研究の成果を原典に刻み込んでいくという行為の内に成立したものである。ルネサンスは、そして近代は、人類の知的所産としての書物から離れるのではなく、その徹底した読解の中に自らの思索を、いわばきめ細かくすり合わせていくという精密な過程の中から生み出されたものであると言ってよい。

(3) 自律的読者の勇気—自らの理解を否定できるか？

続いてマンゲルが本書において提示するのは、そうした自律的な読書の結果得られた自らの理解を、しかし否定するだけの勇気を持った読者の姿である。ここで彼は、「読者に対して作品を理解できたという錯覚を与えつつ、同時にこれを奪い去る」ような作品執筆を強く意識したフランツ・カフカ、そのカフカの読書のありようを

象徴的に示すようなエミール・フィラの「ドストエフスキーの読者」という絵画、そして、ユダヤ人の生活や宗教、道徳などの律法をまとめたタルムードと呼ばれる書物の研究に従事した代々の学者たちの読書法を紹介する。なかでもタルムード学者の読書法は、読者の自律性に関して苛烈なまでに厳格であり、禁欲的であったことが分かる。というのも、タルムード研究に関する書物は常に第一ページが抜け落ちている、というのである。その理由は何か。マンガエルは、18世紀の律法学者レヴィ・イツハックの言葉を引用して説明する。「たとえ膨大なページ数を読者が読み進めたところで、自分はまだ、まさに第一ページにいたってはいないのだということを決して忘れてはならないからだ。」そしてこのタルムード学者の考え方とカフカの次のような見解が結び合わされることになる。1904年、カフカが友人オスカー・ボラックに宛てた書簡の一節である。「我々を幸福にしてくれる本なんて、困った時に自分たちで書けばよい。本当に必要なのは、ものすごく大変な痛々しいまでの不幸、自分以上に愛している人物の死のように我々を打ちのめす本、人間の住んでいる場所から遠く離れた森へ追放されて自殺する時のようなそんな気持ちを抱かせる本なのだ。書物とは、我々の内なる凍った海原を突き刺す斧でなければならないのだ、そう僕は信じている。」

作者の側からも、また読者自身の側からも、書物や作品の一義的な理解を否定するこのような読書のあり方は、今日の読書指導などの現場では一笑に付されるものかも知れない。だが高校時代のマンガエルは、こうしたカフカ流の読書論に接し、そこにはじめて「読書の自由に対する感覚」を味わったということを告白する。第一ページをあえて抜き去るような行為は、確かに読者を不安に陥れるものではある。しかし、それだけ峻厳な姿勢をとることによって、すなわち自らの理解をも否定するような行為によって、はじめて既成の権威が背景に退き、読書の、そして思索の真の自由が得られるのである。各人各様の解釈を表面的のみに導き、その解釈を自ら否定するような勇気を育てない読書法が横溢しているとすれば、それは、教養を生み出すはずの人間の知的精神の自由な発露をむしろ阻害していると言えるのではあるまいか。電子媒体であれば単なる欠陥品でしかないこの「失われた第一ページ」の姿は、教養の文化史における読書の意義を考える上で、最も重要な項目の一つである。

(4) 図書分類、学問分類、社会規範を超えて

古今東西、書物は何らかの形で整理され、分類されてきた。古代アレクサンドリアの図書館をはじめ、書物の分類は、図書館の歴史の重要な部分を構成するものである。もちろん、書物の形状や成立年のような外的な基準で整理される場合もないわけではないが、通常は、例えば今日の十進分類法のように、まずは書物の内容によって大きく分類される。そしてこの分類は、言うまでもなく、学問や知的世界そのものの分類とも重なってくることになる。今日の大学図書館などで、人文科学、社会科学、自然科学などの図書館がそれぞれ独立している場合が少なくないのも、こうした事情による。

しかしながら、ここで注意しなければならないのは、前項で述べた、一義的な読解を拒絶する読書のあり方は、当然のことながら、書物の便宜的な分類、ひいては学問分類そのものに対しても絶対性を否定し、創造性に富む柔軟性を付与するものである、という点である。既存の学問分野に応じた書物の分類は、もちろん専門分化を反映して、その利便性を図ったものにほかならないが、書物が、そして読者が、そうした既存の分類に安住する限り、新たな教養を生み出すという、読書が本来有する柔軟性は損なわれてしまう。そればかりではない。既存の学問分類が社会における何らかの階層化や範疇化につながっているとすれば、既存の社会通念に疑義を投げかけるはずの読書の可能性が大きく阻害されているということになる。階級やジェンダーの問題に関して、実は古くから多くの書物が自由で柔軟な発想のもとに記されてきたにも関わらず、しばしばそれが等閑に付されてきたのは、人間が、異種混淆的に書物を読んで思索する自由と能力を有しながら、それをしばしば放棄してきたからにほかならない。それもまた読書と教養の文化史の一面ではあるが、しかし同時に、縦横無尽な読書行為が新たな教養の展開に大きく貢献してきたこともまた事実である。「最後のページ」と名付けられた終章を「まだ終わっていない」という言葉で締めくくるマンガエルの読書に対する希望は、まさにこうした真に自由な読書の行く末に宿っていると考えられる。

3. 読書に求められること、教養に求められること

「読書と教養の文化史」を締めくくるにあたって、読書に求められること、そしてその読書を通じて創造される教養に求められることを、二つに絞って指摘しておきたい。ひとつは、既存の分類や範疇への依存をいったん留保し、受動的ではなく、読者自身がさまざまな思索や情念を統合する主体として機能するような能動的読書が必要である、ということ、第二に、そうした読者の主体性を確保するのは、未知のものを既知とする読書にとどまらず、そうした自らの理解を疑い、場合によっては否定し、その上で、既存の権威を越えた新たな理解を構築する勇気を持つ必要がある、ということである。真の教養を創造する力は、こうした読書の延長線上にあると考えられる。

